

## 教員おすすめ図書コーナー推薦書

教員氏名	
宮田 剛志 先生	おすすめメッセージ
<p>① 図書名：農村政策の変貌-その軌跡と新たな構想</p> <p>著者：小田切徳美</p> <p>出版社：農文協 ISBN：9784540201738</p>	<p>農村研究は、農業経済学・農政学の中では、少なくとも主流ではない。「食料・農業・農村」に「法」をつけたいいわゆる「新基本法」の文脈でも、農村は最後に配置されている。しかし、それは重要度が低いという意味ではない。食料-農業の間には、加工・流過程があり、両者は等価で結ばれる。それに対して、農業-農村の関係は異なる。当然のことながら、農村には農業以外の産業もあり、また産業的な要素だけではなく、生活、景観を含む環境、文化、福祉などの側面も持つ。つまり、農村にはそこに暮らす人々の多様な暮らしと息づかいがあり、そのすべてが農村である。したがって、農村は最後ではなく、基盤にある（以上、「はしがき」より引用）。</p> <p>本書では、このような農村研究における理論と政策の「今」や、農村再生の議論と実践等が論じられており、ポストコロナの農村に関する理解を深めるにあたり最適、かつ、最新の図書の1冊です。</p>
<p>② 図書名：レクチャー 第一次世界大戦を考える カブラの冬 第一次世界大戦期ドイツの飢餓と民衆</p> <p>著者：藤原辰史</p> <p>出版社：人文書院 ISBN：9784409511121</p>	<p>第一次世界大戦中、ドイツでは、貧富の差がそのまま反映され、七六万人の餓死者をもたらすこととなった。戦後のヴァイマル共和国のもとでは、飢餓の原因を洗い出し、それを根底にすえた食糧政策が打ち立てられず、飢饉で苦しい思いをしたり、親族を亡くしたりした人々の憎悪は行き場を失い、そういった人々のヴァイマル共和国の民主主義に対する不満が必然的に高まった（以上、「おわりに」より引用）。</p> <p>食料・農業・農村基本法の見直しが進められる中、食料安全保障や日本の農業について、どう考えたらいいのかに関して、本書は、「考えさせられる1冊」です。</p>
<p>③ 図書名：国際秩序</p> <p>著者：ヘンリー・キッシンジャー</p> <p>出版社：日本経済新聞出版社 ISBN：9784532169763</p>	<p>現代の新グローバル・ヴェストファーレン・システム-くだいていうなら国際社会-は、世界の無秩序な性質を抑えるよう努力してきた。開放的な貿易と安定した国際金融システムをはぐくむために、国際法や国際機関を大幅に拡充し、幅広く認められるような国際紛争の解決策を確立し、戦争が起きたときには過剰な行為を制限するような条約を定めた。国家から成るこのシステムは、現在、あらゆる文明と地域に及んでいる。このシステムの国際機関は、多様な社会が交流できる中立的な枠組を-それぞれの価値観におおむね関わりなく-提供している。しかしながら、ヴェストファーレンの原理は、あらゆる方面からの攻撃にさらされている（以上、「序章」より引用）。</p> <p>本書では、17世紀の三十年戦争後、今日に至るまでの「国際秩序」の原理を理解するための端緒に最適で、かつ、最新の図書の1冊です。</p>